

## 文脈における理解度の研究

### －文脈の違いによる文章の理解度の違い－

日大生産工(学部) ○小島 直城

日大生産工 山本壽夫

#### 1 まえがき

現在の日本では、若者の活字離れ、読書習慣の減少をよく耳にする。また、自分のために使える時間が減少したともいわれている。これに伴い、読書時間と読書習慣が減衰した。これらの問題に対し、短時間で効果的に学習・理解できるわかりやすい文章を、文脈を整えることで作成することにより解決を図る。

#### 2 先行研究

先行研究として以下の項目に関する研究を前提とする。

(1)小林潤平 (2016) 「読み効率を高める日本語電子リーダーの設計の試み」 情報の科学と技術

(2)島田英昭 (2016) 「教材の構成要素が読解への動機づけに与える影響」 教育心理学研究 2016

(3)ジョルダン アルノ・荒木 健治(2006) 「遺伝的アルゴリズムを用いた帰納的学習による音声対話処理システム GA-ILSD における質問応答能力について」 言語獲得と理解研究会報告 第七号

上記(1)では、電子リーダーにおいて、横書きが縦書きと比べて150字も早く読める、また文節間で改行することで読み速度を1.5倍に引き上げることが表すことができる。

上記(2)では、文章を読む際の、動機づけや主観的わかりやすさの要素を表している。

上記(3)では、遺伝的アルゴリズムを用いて文章理解について表されている。これらを用いて、読みやすく、理解しやすい文章を文脈に焦点をあて作成する。

#### 3 読書の有用性

「読む力は重要だ。いくら[考える技術]や[知的生産の技術]を得たとしても、あるいは、最近の流行である[情報入手の技術]や[情報の整理法]を得たとしても、その基盤となるのは[読む力]である。……。基本となる[読み込む力、読みこなす力、読み切る力]がなければ、[考える力]はつかない。」(妹尾,2002)  
また、「この読む力を、育てることに必要なものとして[字を読む]だけでなく[理解する、解釈する]。[字を書く]だけでなく、[表現する、説得する・共感させる]。これらを鍛えなければならぬのである。」(妹尾,2002)  
この内容において読書は「読み込む力、読みこなす力、読み切る力」「理解する、解釈する」といった能力を鍛えるのに最適である。

#### 4 現状分析

「読書量の減少理由」また「本を読まない年代」について、分析を行う。

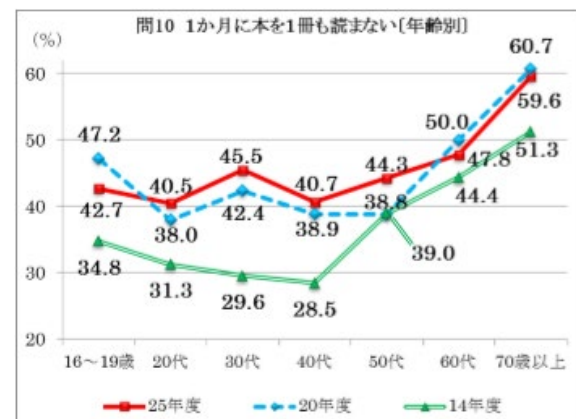


図1 1か月に本を1冊も読まない(年齢別)  
(出典:文化庁 平成25年度「国語に関する世論調査」)

## Study On The Degree Of Comprehension In The Context

### －The Degree Of Comprehension On The Text By The Difference In The Context－

Naoki KOJIMA, Hisao YAMAMOTO

現代日本人の読書量の減少理由は以下のグラフによって表されます。

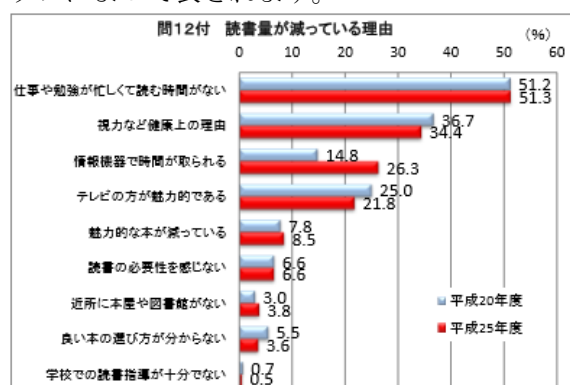


図2 読書量が減っている理由  
(出典:文化庁 平成25年度「国語に関する世論調査」)

1 か月に読む本の冊数の推移は以下のグラフによって表されます。

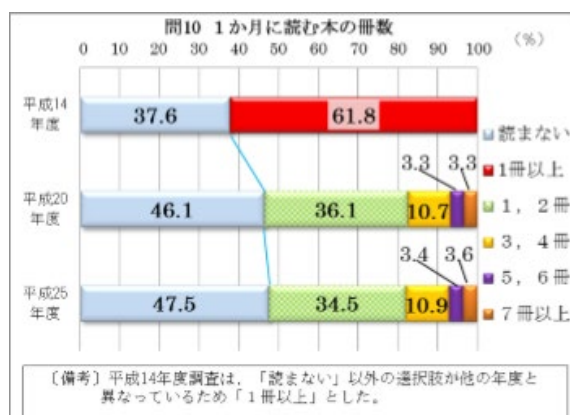


図3 1か月に読む本の冊数  
(出典:文化庁 平成25年度「国語に関する世論調査」)

※図1から図3の平成25年度の調査対象総数は3,473人、有効回答数は2,028人である。

## 4.1 現状分析の推察

今の日本人は、年齢が高くなるにつれて、読書習慣が減っている。また、平成14年度から平成25年度と年数が経つにつれて、読書をしない割合が増加している。また、読書量の減少理由に「仕事や勉強が忙しくて読む時間がない」が51%と過半数を占めていた。これより、現代日本人の読書の現状は、仕事や勉強が忙しいため、読書時間が減少しており、年々、読書量がすべての年齢において減少傾向であり、本を読まない人や本を一冊も読まない人が年々増えている。

## 5 問題点

上記の現状分析から、年々読書に割く時間が減少していることが問題である。また、年齢別ではあるが、1か月に一冊も読んでいない人の増加が問題といえる。以上から、年々読書が満足にできず、連動するように読書習慣がなくなり、その結果、読書に割く時間がさらに減るという負の連鎖が発生していると考えた。

## 6 対応策

読書に使える時間が減少した、問題に対して、短時間で本を理解出来るといった読み効率を上げる文章を文脈の観点から作成し、短い時間でも満足できる読書を促し、負の連鎖を改善する。

## 7 検証

遺伝的アルゴリズムを用いて分かりやすい文章作成の要因を検索し、策定する。さらに作成した文章について、アンケート方式を用いて読みやすいか、理解度は変化したかなどの評価を行う。

さらに実際に文章を読んだ時間を計測し、改善前の文章とどれほどの差が生じたかを測定する。

## 8 終わりに

今後、この「文脈における理解度の研究」の展望について、電子書籍分野に対しても広げてゆきたいと考えている。また、本研究において、ご指導ご鞭撻を賜りました山本壽夫先生に心より感謝をいたします。

## 「参考文献」

- 文化庁 「平成25年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」  
[http://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tok\\_eichosa/kokugo\\_yoronchosa/pdf/h25\\_chosa\\_kikka.pdf](http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tok_eichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/h25_chosa_kikka.pdf)
- 志水宏吉・伊佐夏実・知念渉・芝野淳一(2014)『調査報告「学力格差の」実態』岩波書店。
- 国立教育政策研究所(2004)『生きるための知識と技能:OECD制度の学習到達度調査(PISA):003年調査国際結果報告書』きょうせい。
- 妹尾堅一郎(2002)『考える力をつけるための「読む」技術』ダイヤモンド社